

令和5年11月5日

調布市議会議員 井上 耕志 様

提出者 調布市議会議員 内藤 美貴子

視察等共通部分報告書

下記のとおり、視察(研修・視察研修)を実施いたしましたので、  
視察等個別部分報告書(第3号様式)を添えて報告いたします。

記

1 実施名称

令和5年度長崎市平和都市交流

2 実施期日(期間)

令和5年10月5日(木)から10月6日(金)まで

3 実施場所(視察先・研修会場)

長崎原爆資料館・国立長崎原爆死没者追悼平和祈念館・平和公園・平和祈念像・原爆落下中心地・山王神社一本柱鳥居・長崎県防空本部跡(立山防空壕)

4 実施目的

原爆資料館や原爆死没者追悼平和祈念館、原爆遺構などを視察し、  
長崎市長・長崎市議会議員を表敬訪問することにより、自治体に



よる平和への取組について認識と理解を深める。

5 参加者の氏名

井上耕志，内藤美貴子，鈴木ほの香，田村ゆう子，青山誠，  
山根洋平，田中謙二，佐藤堯彦，榊原登志子

6 実施結果（視察概要・研修概要）

別紙記載のとおり

7 実施結果に対する所感，意見等

視察等個別部分報告書のとおり

## 訪問先及び視察概要

### 1 平和祈念事業

日 時 令和5年10月5日（木）

午後1時30分から午後4時45分まで

場 所 平和公園・平和祈念像・原爆落下中心地・山王神社一本  
柱鳥居・長崎原爆資料館・国立長崎原爆死没者追悼平和  
祈念館

日 時 令和5年10月6日（金）

午前11時から午前11時30分まで

場 所 長崎県防空本部跡（立山防空壕）

#### 説明及び対応者

長崎原爆資料館長 井上 琢治氏

平和推進係長 豊 美弥子氏

被爆継承課長 伊福 伸弘氏

国立長崎原爆死没者

追悼平和祈念館長 高比良 則安氏

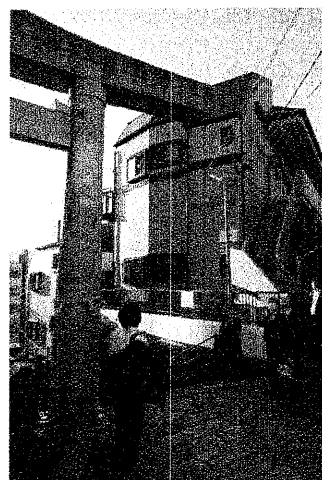
#### 概 要

長崎市の平和行政の新たな柱となる、「平和の文化の醸成」や「被爆の実相を継承する主な取り組みについて」各担当者から資料を用いて説明を受けた。長崎市は被爆75年の節目が終わり、核兵器禁止条約が発効した令和3年からは、次の節目である被爆100年に向けて新たにスタートした。これまで、重点的に取り組んできた「被爆の実相の継承」及び「核兵器廃絶の推進」に加え、多くの人が当事者として自分の興味のある分野や身近なところから平和について考えられるように、スポーツや芸術などを入口として、日常の中に平和の文化を根付かせるべく「平和の文化の醸成」（被爆100年に向けた次の25年の重要なキーワード）に取り組んでいく

旨の説明があった。

続いて、被爆の実相を継承する主な取り組みについては、青少年ピースボランティアの育成・青少年ピースフォーラム・青少年平和交流・平和学習発表会・平和学習教材・平和記念アピール事業・平和の灯・「語り継ぐ被爆体験（家族・交流証言）」について予算額なども含めて具体的な説明や、小・中・高校生の修学旅行の地域の割合や動向の分析について説明を受けた。

また、行程の中で平和祈念像や国立長崎原爆死没者追悼平和祈念館を訪問し原爆の犠牲者を追悼すると共に、原爆落下中心地、爆心地から800メートルに位置する山王神社の一本柱鳥居や被爆クスノキ、長崎原爆資料館、原爆投下時に県知事等が指揮を執っていた長崎県防空本部跡（立山防空壕）を視察し、原子爆弾の惨禍について認識を深めた。



## 2 長崎市長への表敬訪問

日 時 令和5年10月6日（金）午前9時から

場 所 長崎市役所8階第2応接室

出席者

長崎市長 鈴木 史朗氏

原爆被爆対策部長 前田 孝志氏

長崎市議会事務局議事調査課長

宮本 康広氏

### 概 要

井上耕志議長から出席者の紹介に続き、視察受け入れに対する謝意を伝え、訪問の趣旨を述べた後、意見交換を行った。

調布市と長崎市の平和交流は、平成15年8月の調布市非核平和都市宣言20周年記念事業の一環として、調布市の小中学生の親子2組が青少年ピースフォーラムに参加したことが最初であった。その後は、会派の視察や調布市としてピースメッセンジャーの派遣やピースフォーラムへの中学生の参加など平和祈念事業を進めており、調布市と長崎市との今後の相互交流などについて意見交換を行った。



## 3 長崎市議会議長への表敬訪問

日 時 令和5年10月6日（金）午前9時30分から

場 所 長崎市役所5階議会特別会議室

## 出席者

長崎市議会議長 毎熊 政直氏

長崎市議会副議長 相川 和彦氏

長崎市議会事務局議事調査課長

宮本 康広氏

## 概 要

井上耕志議長から出席者の紹介に続き、視察受け入れに対する謝意を伝え、訪問の趣旨を述べた後、意見交換を行った。

調布市と長崎市の平和交流は、平成15年8月の調布市非核平和都市宣言20周年記念事業の一環として、調布市の小中学生の親子2組が青少年ピースフォーラムに参加したことが最初であった。その後は、会派の視察や調布市としてピースメッセンジャーの派遣やピースフォーラムへの中学生の参加など平和祈念事業を進めており、調布市と長崎市との今後の相互交流などについて意見交換を行った。



第3号様式（第4関係）

視察等個別部分報告書	作成者氏名	井上 耕志
1 視察（研修・視察研修）の実施名称（テーマ）		
令和5年度 長崎市平和都市交流 長崎県長崎市 平和祈念事業について		
2 実施結果に対する所感，意見等 （質疑・意見交換した内容，今後の市政に生かすべき点等）		
現地視察 爆心地公園・平和公園・長崎原爆資料館・国立長崎原爆死没者追悼平和祈念館 山王神社～一本柱鳥居・立山防空壕		
<p>令和4年から始まった長崎県長崎市との平和都市交流は本年二年目を迎えた。今年は市内各地の現地視察に加え、第36代の鈴木史朗長崎市長はじめ第59代の毎熊政直長崎市議会議長への表敬訪問なども行わせていただき、被爆地の市議会として「長崎を最後の被爆地」にするため、世界の恒久平和に向けた不断の努力をなさっている市議会の活動の一端にも触れることができた。</p> <p>今回の平和都市交流で特に記載したい内容は二点であり、一点目として長崎市平和行政の新たな柱としての「平和の文化の醸成」についてまず記録しておく。令和3年、長崎市としても悲願であった「核兵器禁止条約」が発効され、「被爆100年」に向けた新たなスタートの年となった。</p> <p>これを受け、長崎市はこれまで重点的に取り組んできた「被爆の実相の継承」と「核兵器廃絶の推進」の二つの柱に加え、新たな三つ目の柱として、より多くの人々が当事者として自分の興味のある分野や身近なところから平和について考えられるよう、スポーツや芸術などを入り口として、日常の中に「平和の文化」を根付かせていく「平和の文化の醸成」に取り組むこととなる。</p>		

平和の象徴としての「鳩」、文化の象徴としての「パレット」をイメージした「平和の文化」ロゴデザインを作成し、令和3年度から平和の文化認定事業を実施する運びとなったそうである。

#### 令和3年度認定事業

- ・ V.ファーレン長崎平和祈念活動
- ・ 平和を願う灯籠流し (サークルK長崎大学)
- ・ Pray for Peace Collection 2021 in 長崎
- ・ 平和賛成! 華和蘭(変わらん)輝きの長崎
- ・ 長崎から世界へ「ピースなTシャツ」

#### 令和4年度認定事業

- ・ 長崎平和祈念茶会
- ・ 忘れないプロジェクト ~8月9日11時2分にシャッターを切ろう~
- ・ 9.21世界平和の祈り

#### 令和5年度認定事業

- ・ ながさき8.9平和展
- ・ 平和の祈り キッズゲルニカ inながさき
- ・ 長崎原爆忌平和祈念俳句大会

など、さまざまな主体による創意工夫を凝らした取り組みを平和の文化認定事業として広く周知することで応援し、平和の輪を広げることにつながっているとのことであった。

記載しておきたい二点目として「被爆体験次世代継承推進」について記録する。この事業は令和5年度当初予算として35597千円を計上して実施されたものであるが、その事業内容として

- ・ 「県外原爆・平和展」開催
- ・ 青少年ピースボランティア育成



- ・「青少年」ピースフォーラム開催
- ・青少年平和交流（少年平和と友情の翼）
- ・「平和学習発表会」開催
- ・平和学習教材配布
- ・「語り継ぐ被爆体験（家族・交流証言）」推進

と多彩である。本市においても戦争の悲惨さを風化させない様々な取り組みをこれまでも実施してきているところであるが、こうした被爆地の生の声を次世代につないでいくこと。そして多様化する現代社会において、当たり前の日常の中に「平和」を意識することができる施策の展開について、今後とも引き続き事例の研究を行ってまいりたい。

### 3 その他（今後の課題・調査研究すべきテーマ等）

文中に記載。

第2号様式(第3関係)

視察等個別部分報告書	作成者氏名	内藤 美貴子
1 視察（研修・視察研修）の実施名称（テーマ）		
長崎市平和都市交流		
2 実施結果に対する所感，意見等 （質疑・意見交換した内容，今後の市政に生かすべき点等）		
<p>長崎市に投下された一発の原子爆弾によって、街は壊滅的な被害を受け、多くの尊い命が奪われました。長崎市平和都市交流訪問団として爆心地公園・平和公園・長崎原爆資料館・長崎原爆死没者追悼平和祈念館・立山防空壕等を視察させていただきました。</p> <p>遺品や被爆資料、被爆の惨状が示された写真・映像資料、長崎に原爆が投下されるに至った経過、核兵器開発の歴史等の悲惨な歴史を知るにつれ、核兵器廃絶を世界に訴え続けていくことへの決意と平和の尊さをあらためて考える機会となりました。</p> <p>また、原爆投下の背景には、広島に新型爆弾が8月6日に投下されたという情報を受け、その3日後の8月9日に知事や警察幹部らが立山防空壕で新型爆弾対策の会議が行われた矢先に原爆が投下されましたが、突然電灯が消えたので防空壕を出て外を見回しても聞いていたような被害がないことから当初は誤報だと思われていたそうです。その理由は、長崎は原爆の威力が広島の1.5倍あったにもかかわらず、投下された場所が山に囲まれている地形だったため、山の裏側の街には被害がほとんど及ばなかったとのこと。また、当初、投下する場が福岡県小倉市の予定でしたが、当日は雲に覆われて投下することができず、あきらめて長崎に向かい雲の切れ目を見つけて投下されてしまったとのこと。原爆投下にはいくつもの悲劇があり、被災地に行って初めて知ることが多くありました。一方、小倉では、長崎が小倉の身代わりになったのではと多くの市民が心を痛め、その後、原水爆禁止宣言の先頭に立って運動される等、平和への取組みに力を入れていたことを知り、胸が熱くなりました。</p>		

また、長崎市の平和行政の取組みについて話を伺いました。長崎市は、原爆の悲惨さを将来にわたって伝え続けるため、語り継ぐ人の育成や被爆の実相を伝えるものや場所の保存活用を図る「被爆の実相の継承」と、国際社会に向けて核兵器のない世界に向けて市民社会が声をあげる環境をつくるための「核兵器廃絶の推進」を重点的に取り組んできましたが、これらの2つの柱に加え、2021年より新たな3つ目の柱として「平和の文化の醸成」に取り組まれています。その背景には、被爆者の高齢化により、被爆者から直接体験を聞くことが難しくなる中、歩みを止めずに前へ進むために持続可能な仕組みが必要だと考え、より多くの人々が気軽に平和について考えられるよう、スポーツや芸術などを入口として日常の中に「平和の文化」を根付かせていく取組みを進め、平和を作る当事者を増やすことを目的としています。この取組みは、誰でも身近なところから行動に移すことができ、言葉の壁を乗り越えて感動や思いを分かち合える芸術やスポーツ等を通して平和について考え、行動し、平和の輪を広げることができると期待し、今後の調布市の平和事業においても参考にしたい取り組みだと思いました。

また、調布市の平和事業では、昭和58年に調布市非核平和都市宣言を宣言し、平成22年には平和市長会議（現在は平和首長会議に加盟）令和2年には調布市国際交流平和都市宣言を宣言。令和3年には日本非核宣言自治体協議会に加入。同じく令和3年には市内の中学生10名が代表で長崎市にピースメッセンジャーとして戦争の悲惨さや平和の大切さについて肌で学ぶ機会が設けられています。

今回の視察を通して、やはり被災地での訪問は肌で学ぶことができるという点から、派遣されるピースメッセンジャーの役割は大変重要であり、もっと増員していくべきではないかと思いました。

3 その他（今後の課題・調査研究すべきテーマ等）

第3号様式（第4関係）

視察等個別部分報告書	作成者氏名	鈴木ほの香
1 視察（研修・視察研修）の実施名称（テーマ）		
長崎平和都市交流		
2 実施結果に対する所感，意見等 （質疑・意見交換した内容，今後の市政に生かすべき点等）		
<p>令和3年に核兵器禁止条約が発効され、「被爆100年」に向けた新たなスタートの年となった長崎では、被爆者がいない時代が刻一刻と迫ってきていることに強い危機感を持たれていると感じた。これまで重点的に取り組んできた「被爆の実相の継承」と「核兵器廃絶の推進」の2つの柱に加えて、新たな3つ目の柱としてより多くの人々が当事者として自分の興味のある分野や身近なところから平和について考えられるよう、スポーツや芸術などを入り口として、日常の何に「平和の文化」を根付かせていく「平和の文化の醸成」に取り組んでいる。</p> <p>特に若者世代の人が平和について話題にしたり発信したりしようとする、「意識高い系」と周りから思われてしまう、という話があり、自身の経験からとても共感するところであった。まさに「平和の文化」が醸成できていないこの社会の空気感であると思う。若い世代が平和や政治についてあたりまえに話すことができる社会をつくらなければならないと思う。</p> <p>職員の方が「核兵器廃絶」についてお話をされていたことは非常に説得力があり、重いものがあった。「核兵器は抑止力と言っても、絶対に使われないという保証はどこにもない。二度と繰り返さないためには核兵器廃絶しかない」という言葉はその通りであると思う。調布市においても、これからを生きる子ども・若者世代への取り組みが重要である。</p>		

### 3 その他（今後の課題・調査研究すべきテーマ等）

若者世代が平和について語ることを「意識高い系」と揶揄されることのない社会にするため、ピースメッセンジャー事業などの子ども時代からの取り組みをより充実させていく必要がある。

長崎のように、スポーツや芸術など身近なところを入り口にして、重苦しくなく平和について思いを寄せる取り組みを若者世代や市民と一緒に考えていけたらよいと思う。

第3号様式（第4関係）

視察等個別部分報告書	作成者氏名	田村ゆう子
1 視察（研修・視察研修）の実施名称（テーマ）		
<p>【平和祈念事業について】</p> <p>現地視察（長崎市役所、原爆資料館・追悼平和祈念館、爆心地公園・平和公園、山王神社一本柱鳥居、立山防空壕）</p> <p>ア、戦争体験者が減少する中で、平和の大切さを発信できる児童生徒の育成に向けた取組とその課題など</p> <p>イ、全国から訪れる小・中学生の受け入れや自治体連携の状況とその課題</p> <p>ウ、平和文化の醸成の取組状況</p>		
<p>2 実施結果に対する所感，意見等</p> <p>（質疑・意見交換した内容，今後の市政に生かすべき点等）</p>		
<p>広島・長崎への原爆投下から78年。被爆者の高齢化が進み、被爆者から直接体験談を聞くことが難しくなっていく中で、被爆の実相を学び、伝え、継承していくために長崎市がどのような事業に取り組んでいるのか、学ばせて頂いた。</p> <p>高校生以上の青少年を対象に募集をする「青少年ピースボランティア」は、青少年が平和交流や学習発表会を通して、平和意識の高揚を図っている。また、中学生を対象にした交流会では、ピースボランティアメンバーがリーダーを担うため、そのような高校生の姿に憧れた中学生が、高校生になってボランティアに応募するというケースが多いとのこと。平和活動を通し、世代の継承がなされていることを実感する。</p> <p>「語り継ぐ被爆体験（家族・交流証言）」推進事業では、自身の被爆体験を託したい被爆者から、受け継ぎたい意思を持つ方が講和を行うことができるよう支援、育成している。被爆者の中には、「家族には語りたくない」という方もいらっしゃるのとことで、家族ではない人が「交流証言者」として語り継いでいくという工夫がなされていた。</p> <p>長崎市では、「核兵器のない平和な世界」を目標に、「被爆の実相の継承」</p>		

「核兵器廃絶の推進」の2つの柱に加え、令和3年度から新たに「平和の文化の醸成」を加え、取り組んでいる。若い人にとって「平和活動」は敷居の高いものとなってしまっている昨今、芸術やスポーツを通して平和を考えることで、「誰もが平和を作る”当事者”であり、”平和”を考え作ることは当たり前である」と思える文化になるよう、工夫をされていた。

「核兵器廃絶」に関しては、今年の長崎平和宣言にて「核抑止に依存せず地球上から核兵器をなくす」ことの必要性が明言されたことも引用し、改めて、「長崎市の核兵器廃絶にかける想い」を質問させて頂いた。それに対し、担当の市職員から「核兵器は、持っていること自体が危険性を孕んでいる。核抑止論は理性の上で成り立つものであり、持っているけれど使わないという保障は無い。”核兵器廃絶”は永遠に訴えていきたいし、長崎市民皆同じ想いです。」という力強い回答を頂いた。このような、被爆地の想いに国はきちんと耳を傾けるべきであると、改めて痛感した。

現地視察では、爆心地公園や一本柱鳥居、立山防空壕等の遺構も巡らせて頂いた。そこには、目で見て肌で感じることでしか得ることのできない悲惨な光景が広がっていた。「被爆地を訪れ、核兵器による結末を自分の目で見て感じてください。」と長崎市長が平和宣言で語っているとおり、多くの方にこの現状を目に入れて焼き付けてほしいと思った。

視察当日も、多くの子どもたちが修学旅行で訪れており、一生懸命メモを取っている姿が印象的だった。是非、子どもたちが感じた感情を語り継いでいってもらいたい。私自身も、学んだことを語り継いでいきたいと思う。

### 3 その他（今後の課題・調査研究すべきテーマ等）

「調布市非核平和都市宣言」にて”核兵器の廃絶と軍備縮小の推進”を謳っている調布市だからこそ、市議会が一丸となって、核抑止論ではなく核兵器廃絶の声を挙げていく必要がある。

第3号様式（第4関係）

視察等個別部分報告書	作成者氏名	青山 誠
1 視察（研修・視察研修）の実施名称（テーマ）		
令和5年度長崎市平和都市交流事業		
2 実施結果に対する所感，意見等 （質疑・意見交換した内容，今後の市政に生かすべき点等）		
<p>本視察では、爆心地公園、平和公園、原爆資料館、原爆死没者追悼平和祈念館、立山防空壕を回り、また、長崎市役所・長崎市議会を表敬訪問することで、平和行政について理解を深めることができた。</p> <p>被爆から80年近くが経過し、被爆者の高齢化が進むことで被爆者から直接体験を聞くことが難しくなる中で、次の世代にどのようにこの悲惨な体験を継承していくかということが大きな課題になっている。その一方で、長崎市では多くの事業を行い、被爆体験を風化させることの無いよう工夫を行っていた。ここでは、特に2点を紹介したい。「県外原爆・平和展」事業では、長崎県外に赴いて、開催都市等と共同で被災資料・被爆写真や平和の取り組みパネルの展示や、被爆体験講話、DVD上映などを行っているとのことであった。長崎市を超えて平和の大切さを知ってもらう取り組みとしては、高く評価されるものであると感じた。また、「青少年ピースボランティア育成」事業では、高校生以上30歳未満の青少年が平和学習会や派遣研修、平和行事でのボランティア活動等を通じて被爆体験の継承や平和意識の高揚を図っていた。中学校までに学んだ平和の意識を途切れさせることなく、被爆体験の継承者を育てる取り組みであり、こちらもまた高く評価されるものであると感じた。</p> <p>また、意見交換の中で印象に残っていることは、「日常の中に平和の文化を根付かせていく」という内容が市長や職員からたびたび出ていたことだ。「平和」に関して何らかのアクションを起こすとき、何となく敷居が高いことを感じさせるものがある。そこで、スポーツや芸術をその入り口とすることで自分の興味のある分野や身近なところから平和について考えられるよう取り組みを行っているとのことであった。こういったソフトな形で平和に取り組む姿勢は調布市としても学ぶことが多いように感じた。</p>		



3 その他（今後の課題・調査研究すべきテーマ等）

上記の通り

第3号様式（第4関係）

視察等個別部分報告書	作成者氏名	山根洋平
1 視察（研修・視察研修）の実施名称（テーマ）		
長崎市平和都市交流視察		
2 実施結果に対する所感，意見等 （質疑・意見交換した内容，今後の市政に生かすべき点等）		
<p>長崎市の平和事業は、その歴史的背景から非常に重要であると言える。1945年8月9日、長崎市は世界で2番目に原子爆弾が投下された都市となり、その結果、多くの市民が犠牲となった。この悲劇的な出来事は、長崎市が平和の象徴となり、核兵器の恐怖を世界に伝える責任を負っている理由となっていることは疑いようがない。</p> <p>今回の視察で伺った長崎市の平和事業では、人々に核兵器の非人道性を教えるとともに、核兵器の廃絶を訴えるための重要な手段となっていることが認識できた。これらの事業は、戦争の惨禍を風化させず、次世代に伝えることで、平和への理解と尊重を深める役割を果たしているのみならず、被爆者（ヒバクシャ）の体験を記録し保存することで、原爆投下の実際の影響を後世に伝えている。これにより、戦争と核兵器の恐怖を理解し、平和を尊重する意識が育まれていると言える。</p> <p>さらに、長崎市の平和事業では、子どもから大人まで幅広い世代の市民が積極的に平和活動に参加しており、市民一人ひとりが平和への責任を感じ、行動し、市民自らの手で平和を築いていくのだという強い意志を感じることができた。</p> <p>こうした中、調布市議会では、昭和58年9月27日に「調布市非核平和都市宣言」を宣言している。また、調布市では平成2年3月23日に「調布市</p>		

国際交流平和都市宣言」を宣言し、その後平成 22 年 8 月 1 日に、核兵器のない平和な世界の実現を願う都市で構成されている平和市長会議に加盟した。これらを踏まえ、調布市では世界平和に向けて、さまざまな平和祈念事業に取り組んでいる。具体的な事業としては、「ピースメッセンジャー」「調布っ子“平和なまち”絵画コンテスト」や「調布市平和映画・講話・朗読会」、「水木しげる生誕 100 周年記念・調布市平和祈念展」などがある。これらの取り組みは、戦争の記憶を風化させず、多様性を尊重した共生社会の実現に寄与している。

こうした平和祈念事業を通じて、市民が平和について学ぶことは、より良い社会を形成するために重要な要素であると言える。ここでは平和教育がもたらす効果を 5 点指摘したい。

#### 1) 歴史の理解

過去の戦争や紛争の歴史を理解しその影響を学ぶことで、同じ過ちを繰り返さないようにすることができるようになる。

#### 2) 平和の価値の普及

平和教育によって、市民は平和、人権、公正、平等などの価値を見出すことができるようになるだけでなく、こうした価値観の涵養を通じて社会全体の調和と共生を促進することが期待される。

#### 3) 対話と相互理解の促進

平和教育を通じて、人々間の対話と相互理解を促進させることが期待される。これによって、異なる背景や視点を持つ人々間の誤解や偏見を減らすことができる。

#### 4) 紛争解決スキルの習得

平和教育では、非暴力的な紛争解決スキルを学ぶことができるため、対立や紛争を平和的に解決する方法を習得することが可能となる。

### 5) 持続可能な社会の構築

平和教育は、持続可能な社会の構築に貢献すると言える。すなわち、平和教育を通じて、市民が社会的、環境的、経済的な課題に対処するためのスキルと知識を身につけていくことができる。

このように、平和祈念事業の推進を通じて、戦争体験や被曝体験といった歴史的事実の継承を図るとともに、社会や世界の状況を幅広く視野に入れながら人権侵害や環境破壊等の国際的課題に対応しようとする視点が養われる。その結果として、子どもたちが世界に目を向けて関わり合い、自らの人生を切り拓く能動的な人材育成につながることから、平和祈念事業の推進は、豊かな人間性を育むことができる非常に意義深いものであると言える。

### 3 その他（今後の課題・調査研究すべきテーマ等）

こうした取組の一層の推進と強化を図ることで、上述した平和教育によってもたらされる効果の最大化を図ることが重要である。その実現のためには、長崎市との人と人との連携強化を図りながら、調布市における平和祈念事業の取組につなげていくことが重要であると言える。私も一市議会議員として、平和の文化の醸成に微力ながら寄与できるよう、尽力していきたいと考える。

第3号様式（第4関係）

視察等個別部分報告書	作成者氏名	田中謙二
1 視察（研修・ <u>視察研修</u> ）の実施名称（テーマ）		
長崎市での平和祈念事業についての取組		
2 実施結果に対する所感，意見等 （質疑・意見交換した内容，今後の市政に生かすべき点等）		
<p>○戦争体験者が減少する中で，平和の大切さを発信できる児童生徒の育成に向けた取組とその課題</p> <p>1. 具体的な取り組み</p> <p>1) 青少年ピースボランティア育成          青少年が被爆の実相や戦争の歴史について学び、様々な視点から平和について考え、行動するボランティアを育成している。募集対象は、15歳以上（中学生を除く）30歳未満の青少年。年間を通じて募集中。令和5年3月末現在、登録者121名。平和学習会の実施、市外県外の平和関連施設等への派遣研修、市内や近隣の学校などからの平和学習や交流依頼への対応など活動中。</p> <p>2) 青少年平和交流          市内中学生を沖縄に派遣して、戦跡や資料館見学、那覇市内の中学生と交流し、双方の戦争被害を伝え合うなど、学び、伝え、友情を深めている。3年に1回実施。青少年ピースボランティアが研修リーダーとして参加。若者間の連携を進め、後継の育成を図っている。</p> <p>3) 平和学習発表会          市内中学生が平和学習の成果発表を通して、他校の活動を知り、自校の取り組みをさらに発展させる機会とするもの。夏休み期間に実施。発表会の進行やファシリテーターを青少年ピースボランティアが担っている。</p> <p>4) 平和学習教材配布          被爆体験の継承、平和の大切さを発信できる児童生徒育成を目的に、副読本「平和ナガサキ」を作成配布。配布対象は、市内小学3年生、中学1年生。他には、被爆絵本「私たちが伝える被爆体験」を市内小学中学校に配布、被爆紙芝居の実施など。</p>		

## 2. 課題

被爆体験者が年々減少していく中、後世に向けて、いかに被爆体験を語り継いでいくのか。長崎市職員のご説明の言葉の端々に、被爆地としての重い責任を背負いながら日々その課題に向き合っている様子が伝わってきた。「長崎を最後の被爆地に」との想いを皆が心に刻み、被爆の実相の継承について、様々な取り組みが行われている。最大の課題は、被継承者すなわち人材の育成であろう。被爆体験者の直接の言葉ほど重いものはない。その重みをしっかり受け止めて、我が事の体験のごとく語り、継承していくのは簡単ではない。その意味で、青少年ピースボランティアの育成がカギとなっていると感じた。

戦後78年。日本の人口に占める戦後生まれが8割を超えた。戦争を知らない世代に「平和」は当たり前すぎて実感がなくなっているだろう。「平和」というと、何か特別なものという感覚かもしれない。そういった世代に、平和を考えてもらうことは簡単ではない。あらゆる機会を捉えて、平和について考え続けてもらう場を提供し続けることが基本となるのではないか。

### ○平和文化の醸成の取組状況

長崎市の「平和文化」という考え方は、調布市においてもおおいに参考になると思う。以下に、長崎の取組を簡単にまとめておく。

市がこれまで重点的に取り組んできた「被爆の実相の継承」、「核兵器廃絶の推進」という2つの柱に加えて、令和3年度から新たな柱として、「平和の文化の醸成」に取り組んでいる。平和のためにひとりひとりが出来ることは沢山あるが、そうは言っても、具体的に何をしたらいいか分からない人、そもそも興味がない人もいる。そんな人々が行動に移すキッカケとして、芸術やスポーツを入り口にしたらどうかとの発想である。市が考える「平和の文化」とは、芸術、音楽、スポーツなど様々な入り口を通して、多くの人たちが当事者として、平和について考え、行動し、平和の輪を広げること。入り口を増やす取り組みを進めることで、平和を考えることが当たり前だと思うような文化にしていこうとするもの。

令和3年度から、日常の中に「平和の文化」を根付かせるため、個人や団体が主体となって実施する平和の文化認定事業を開始した。「平和の文化事業認定制度」の第1号として、2021年にV・ファーレン長崎が取り組む平和

祈念活動が認定された。被爆地長崎にあるクラブとして、サッカーという「文化」を通して、幅広い世代に平和へのメッセージを広げている。

3 その他（今後の課題・調査研究すべきテーマ等）

○調布市の平和祈念事業の今後について

長崎市、広島市と具体的にどのような連携ができるのか。

第3号様式（第4関係）

視察等個別部分報告書	作成者氏名	佐藤堯彦
1 視察（研修・視察研修）の実施名称（テーマ）		
令和5年度 長崎市平和都市交流		
2 実施結果に対する所感，意見等 （質疑・意見交換した内容，今後の市政に生かすべき点等）		
<p>今回、初めて平和都市交流という形で長崎市を訪れたが、総じて有益な視察研修であったと感じる。</p> <p>一日目は長崎市内の原爆史跡を中心に視察した。平和公園の平和祈念像、爆心地公園、原爆資料館、原爆死没者追悼平和祈念館、山王神社二の鳥居などの史跡を観覧した。どこも印象深く拝見したが、中でも特に原爆資料館、原爆死没者追悼平和祈念館の両施設において担当の方にかがった詳しいお話は大変胸の内に響くものだった。</p> <p>二日目は立山防空壕、長崎市役所を訪問した。ご挨拶のあとには、新築されたばかりの庁舎を見学することができた。ユニバーサルデザインをふんだんに取り入れた庁舎は大変参考になるものだった。</p>		
3 その他（今後の課題・調査研究すべきテーマ等）		
<p>長崎市との平和祈念交流は大変有意義なものと改めて感じたので、次はこれをどう市民の利益へと還元していくかを考える必要がある。現在までに行われている事業では市民の参加数が少なく、特に教育的観点からの事業へのテコ入れが必須であると考え。議員が長崎市を訪れるだけでなく、教育事業、または民間での長崎市との交流を促す措置の必要性を感じる。たとえば、前者としては長崎市から講師や青少年を調布市に招き、調布市内の児童・生徒と交流する事業が考えられる。長崎を訪れることで得られる体験も重要であるが、原爆の被害者やそのご家族の話調布市の青少年に伝えてもらうことも効果的である。もしくは、青少年同士の交流も有意義である。後者としては、市民同士の交流を促すための旅費の補助制度などを検討していくべきと考える。どちらにせよ、議員を中心とした交流が深まってきた段階で、次は市民交流に向かっていくべきと考える。</p>		



第3号様式（第4関係）

視察等個別部分報告書	作成者氏名	榊原 登志子
1 視察（研修・視察研修）の実施名称（テーマ） ・令和5年度長崎市平和都市交流事業（10月5日・6日）		
2 実施結果に対する所感，意見等 （質疑・意見交換した内容，今後の市政に生かすべき点等） ・戦渦による被爆国である日本国が核兵器を永久に使用することがない ように語り継ぐことの重要性が増している。戦渦により世界で被爆の経験 を持つのは日本国だけであり、核兵器の危険について一番、良く知っている からである。また、今日の世界情勢からも伝承は重要である。しかし、 終戦（敗戦）から78年を迎えているが、戦争により多くの尊い命が失われ ることと核爆弾の恐ろしさを伝承することが少なくなっている。一見して みれば戦闘などの紛争や戦争が起こっていないからであり、自分ごととし て捉える時間も少ないように感じている。また、被爆体験者や戦争の経験 者が人生を終えていることがあり、実体験の情報収集が困難なことが一つ の要因である。 実体験の話や戦跡を視察、学習することは大変、心に響き、理解できる ことである。調布市平和祈念事業のちょうふピースメッセンジャーとして 派遣しての学習事業の報告でも「講話学習より現地に行つての学習が良く 理解できる」と書かれている。また、平和の大切さと活動を行いたいと強い 意志も表現されている。伝承という大切さを長崎市では、平和の文化認 定事業が行われており、令和5年度から被爆体験次世代継承推進する事業 をおこなっている。被爆体験次世代継承推進する事業は、NHKでも報道さ れた。その報道番組では伝承したいという方も多くおられるということだ った。長崎市での事業は誰もが平和への取組みを幅広く活動して欲しいと いうことであつた。憲法や歴史についてということにとらわれず、スポー ツでもアートでもファッションでも気軽な取組みから活動している。この ような事業が個々人の活動として日本全国で広がることを願うところで す。 また、私の気持ちとして感じていることだが原爆開発についてほとんどの の米国民は誇りを抱いていることは、とてつもない破壊と悲惨な死を遂げ		

た日本国とでは、今日において認識に差があるのかもしれない。世界広しと云えども原爆と原発を経験した国は、日本国だけであるから恒久平和を願い行動しなければならないと思っている。いまだに、核と共存し核を所有し核実験を行う国があってはならない。核による脅威と核抑止論の正当化を許さず世界の恒久平和への道を牽引するのは、日本国でなければならない。

今日のロシアによるウクライナへの侵攻での激化も終わりを見せない中、様々な武器供与があるがウラン濃縮の副産物の劣化ウラン弾をウクライナへ供与したのは米国だった。このような副産物も原発が存在することからであり、使用すべきではないのではないのでしょうか。

### 3 その他（今後の課題・調査研究すべきテーマ等）

○紛争ということが世界のどこかで行われている状況を市民がどれだけ、関心事として持っているのか、また、平和についても関心を持っているか、また、活動の意欲などのアンケート調査を継続して行う必要がある。

○戦争という歴史について義務教育では特に教科書への掲載が減少していることが課題。なぜ、戦争や紛争を起こしてはならないのかという学習ができる場や時間が必要だが。提供の場など人員も課題。